



フクシマの視点

[日経ビジネス オンライントップ](#) > [IT・技術](#) > [フクシマの視点](#)

半年後に飲めるぞ「復興麦酒」

「農業の6次産業化」目指す元農水省キャリア夫妻の挑戦

2011年11月2日 水曜日 藍原 寛子

原発震災で逆風の真ただち中にある福島県の農業。かつてない厳しい環境のなか、「何とか農業を“復興”させよう」と、有機農業に取り組み、地ビール「復興麦酒」作りを始めた元農林水産省キャリア官僚の夫妻がいる。福島県の中通り、二本松市戸沢の山あい「ななくさ農園」を営む関元弘さん(40)、奈央子さん(37)夫妻である。

今から5年前、有機農業の素晴らしさにほれ込んで、ともに農水省を退職、関さんが人事交流で勤務したことのある同市(旧・東和町)に移り住んで農業を始めた。

震災後、「復興麦酒」の製造に向けて、今年7月に酒類製造免許(発泡酒)を取得。訪問した10月28日、関さんは、地ビール造りの第一歩となる大麦まきの準備をしていた。



「農業の自給文化の復興に向けた試み」と話す
関さん(二本松市戸沢で)

会って話を聞き始めるなり、関さんの農業の復興への熱い思いがあふれ出した。

「正直なところ、地ビール作りは、『売りたい』というよりも、『農家の自給の文化を取り戻していけたら』、そんな思いからです。かつて農家は、自分で原料だけでなく酒まで造っていたのに、法律などで造れなくなっ
てしまいました。農家自体も自給の文化を手放して外部経済に依存し、経済の循環に取り込まれてしまい

ました。農村には『食糧とエネルギーは自給できるぐらいの量がある』と言われていた頃のように、『何でもできる、何でもある』という農村の姿を提案したいと思います」

「本来あった農家の自給の文化を取り戻すことで、農業が活性化していくと信じています。そういう意味で、私の言う復興とは、原発災害からの復興だけではなくて、農業が本来持っていた自給文化の復興でもあるんですね」

有機農業にあこがれて農水省退職

関さんは東京都出身で1997(平成9)年に農水省に入省、国際部で国際協力関係を担当した。2年後に人事交流で東和町役場に出向したときに、地元の農家との交流が生まれ、農業の素晴らしさを体験した。農水省に戻って生産局生産資材課に勤務。そこでBSE(牛海綿状脳症)問題が発生し、食品のリスク評価をする食品安全組織の設立準備に携わった。

「食品安全の仕事を通じて、科学的な見方ができました。生産とは違う分野で、消費者側から見るという得難い経験をしました」

農水省に戻った後も東和町で体験した有機農業への思いが募り、先に関さん、次いで奈央子さんがそれぞれ退職。夫婦で福島に移住して農業に就き、現在は10カ月の長女と3人で暮らす。

いわゆる「キャリア官僚」の職を離れて選んだ農業の道。

「後悔するということはありませんね。まいた種がちゃんと発芽して、収穫できるのが、とてもうれしい。毎年ワクワクしますね。自然の中でいろいろ工夫しながら作業するのも楽しくて、農業は良い仕事だと思います。いろんな人とつながっていける可能性も秘めているのも、農業の恩恵です」。さわやかな笑みがこぼれた。

夫妻が写真と文章で綴る「[ななくさ農園のホームページ](#)」や、ブログ「[おいしい里山生活](#)」にも、農作物を作る喜びがあふれている。

「復興麦酒」の“種”をまく

「私は麦っていう作物が好きなんです。秋にまかれて、麦踏みされて。踏まれれば踏まれるほど、横に根を張って強くなる。穀物の中では、はみ出し者の荒くれのようでも、パンにも麺にも、ビールにもなる。そこがいいんです」

関さんは、殻(から)や枝葉と麦を分ける手動の装置「トウミ」を操作しながら、目の前の麦粒に優しい視線を注いだ。

準備ができて、いよいよ麦まきへ、自宅向かいの畑に出た。木につながれた関さんの白いヤギが1頭、周囲の田畑や里山に響き渡る大きな鳴き声で出迎えてくれた。「あの鳴き声は『寂しい』って言うんですね。しばらく人の姿が見えなかったので」。

トラクターで整備された畑に、手押しの種まき機や三角すきを使って大麦をまいていく。種まき機は、手押しで進めると自動的に大麦が土に差し込まれ、ローラーが土をかぶせるようになっている。カラカラ、カラカラ…、ローラーが回る音とヤギの鳴き声。ふかふかの土に長靴の足跡が増えていく。



ヤギの鳴き声が響く中、麦まきをする関さん

「土は、まだまだ。それでも5年前と比べるとだいぶ良くなってきました」

静かな山あいの田畑に、秋の日差しが温かく差している。

「うーん。麦粒がちゃんと下に落ちているのかな。大丈夫だな。うん、減っているね。私は心配性だから…ははは」。関さんは何度も何度も、種まき機から出る大麦の量が減っているのを確認しながら、前に進んでいく。「ビールはやっぱり、飲んでおいしいものを作りたいですね」。

復興への“種”は、たった今、まかれたばかり。収穫されてビールになるのは、あと半年後のこと。楽しみは、もう少し先になる。

目指すのは「農業の6次産業化」

関さんが目指す農業の姿の1つに、「農業の6次産業化」がある。「6次産業化」とは、生産者である農家は農作物を作って終わりではなく、農作物を加工し、消費者にも参加してもらうという流れを作っていくこと。そのために、今回の「復興麦酒」造りでは今後、麦まきや麦踏みなどに、関心のある都会の人、農家以外の人にも参加してもらうことにしている。

「今までの農業は、農村自らが情報を出すということがあまりありませんでした。自分自身の思いを込めて消費者に伝えていくことが、足りなかったんだと思います。1人でも2人でも関心のある人、体験してみたい人に来てもらいたい。こういう時だからこそ、生産者と消費者の顔が見える農業、お互いに農業の価値や楽しさを共有できる農業が実現できたらと思います」。これからも、関心のある人の参加を呼びかけていくという。

原発震災の危機をどう受け止めるか

原発事故の発生で、関さんは当初「今年は相当厳しくなる」と予想した。ところが、現実には違った様相で展開しているという。

「私自身には逆風がほとんどありません。先日は、有機農産物しか取り扱わないバイヤーさんが『応援している』と言ってくれました。バイヤーさんも『今回の原発事故の後、取引しないとやってきた会社なんて、その程度の会社。逆に価値観を共有できるのはどの会社か選別できたから、かえって勉強になった』と言ってくれました」。

「『福島なんかもうだめだ』と言う人もいますが、逆に応援してくれる人もいます。『原発ごときに、何をしゃべってくれたんだ』と反省しなければなりませんね」。

価値観が共有できたバイヤーとの信頼関係が深まり、さらに仕事を広げることができる可能性。そんな新しい農業の可能性も関さんの前に広がってきており、農作物と汚染の状況は次のように見ている。

「やっぱり、原発事故で土壌汚染が心配になりました。ところが春先以降に種をまいて収穫した作物の放射線値を測ると、ND(検出限界値以下)ばかり。測定結果に関してはさまざまな考え方があるでしょうが、放射性物質が土中にあっても作物に検出されなかったり、また人間が放射能を防護できるのであれば、それは汚染やリスクにつながらないのではないのでしょうか」

「あとはモニタリングを徹底して、農業者への被ばく防護への投資をするなど、しかるべき対策について整理してもらいたいと思います。トータルでリスクを管理するシステムが必要で、それがなければ本当に危ない状況になってしまうでしょう」

生産者と消費者をつなぐ農業

今、福島県の農業が抱える危機についてはこう分析する。

「そもそも農業は原発が起きる前から、高齢者や担い手不足などで斜陽産業化していて、自由化の波も押し寄せていました。これが原発事故によって、ますます農業離れが加速するのではないかと心配です。地域が米作を中心とした農業で成り立っている部分があるので、農業は重要です。農業が傾いてくると、地域社会がぎくしゃくしてくるのではないかと、何とかしなければ、と思います」

福島県の農業は他の産業に比べて、生産量や売上高などの数字に現れない部分での意義や重要性も大きく、それが人々のコミュニティや精神的な影響として現れてくるのではないかと、関さんは懸念する。

「いろんな考え方があると思いますが、農業基本法以来、選択的拡大、つまり職種を絞ってその規模を拡大する政策が取られ、農水省は面積を集約して大規模化して集中補助して支える方針を取りました。それも1つの考え方でしょう。しかし、ここのような中山間地域は、面積を広げて効率化を図ることができない故に地形を利用し、自然環境を活用しながら農業をしてきました。今後の可能性としては、大規模化というよりは、有機農業のような形で農業そのものの付加価値を高めていくこと、農家が自分自身で加工してみることで、さらには消費者と交流する農業を目指すことが挙げられます」

「それと、我々農家が、都会にはない農村の価値観と癒しの場を提供するという形で、都市や消費者と連携していければ、農村に人が入ってくる可能性が見えてくるのではないのでしょうか。農業は本来、多様なものなので、多様性を認める農業政策があっても良かったのではと思います」。

関さんが、生産者と消費者をつなぐ農業を目指す理由もここにあった。

TPP、何が起こるか分からない

今、福島県の農業に押し寄せる波は、高齢化、後継者不足、そして原発事故だけでなく、TPP(環太平洋経済連携協定)の問題もある。関さんには、大きな課題が複合的に一気に押し寄せている農業の現状がどう見えているのか。

「TPPについては、正直、何が起こるか分からない、何をしようとしているのか分からないという感じですね。私個人は、TPPに賛成も反対もないのですが、人とモノとカネが自由に動ける状況をTPPというのな

ら、危ないのだろうなとも思います。日本に安いコメが入ってきて、このあたりの高コストのコメ生産農家が兼業や赤字になり廃業すれば、田んぼが荒れて人の心も荒れた地域社会になるかもしれません」

「実際、この東和町はかつて養蚕日本一と言われていました。それが自由化によって養蚕が衰退してしまった。田んぼもそうなる可能性はある。無条件の自由化がもたらすものは破壊でしかない。ただ、だからと言って反対ばかりではダメで、農村と都市部がつながる努力をしていかないといけないと思います」

やはり大きな問題を解決するカギは「生産者と消費者のつながり」、そして「農村と都市のつながり」という関さん。11月12日には、福島市で開かれる「[東北まちづくりオフサイトミーティング勉強会](#)」(コラッセふくしま)では、ほかの5人のパネリストとともに登壇し、農業への思いや福島の復興の姿を発表する予定だ。

農業の復興への思いを乗せて動き出した「復興麦酒」。その後、オーガニック居酒屋のオーナーから先行販売をしたいという申し出があったという。麦まきへの問い合わせもあった。「復興麦酒」は、生産者と消費者だけでなく、販売に関わる人も巻き込んだ、農業復興のシンボルとしての期待を受け、少しずつ動き出そうとしている。

[このコラムについて](#)

フクシマの視点

東日本大震災は、多数の人命を奪い、社会資本、自然環境を破壊したが、同時に市民社会、環境、教育、経済、政治や行政など、各分野に巨大なパラダイム・シフトを起こしている。我が国はどのような社会を志向していこうとしているのか。また志向していくべきなのか。「原発震災」で、社会の姿が大きく変わりつつある福島、震災のフロントラインで生きる人々の姿から、私たちの社会のありようをグローバル(グローバル+ローカル)な視点で考える。

[⇒ 記事一覧](#)

[著者プロフィール](#)

藍原 寛子(あいはら・ひろこ)



フリーランスの医療ジャーナリスト。福島県福島市生まれ。福島民友新聞社で取材記者兼デスクをした後、国会議員公設秘書を経て、現在、取材活動をしている。米国マイアミ大学メディカルスクール客員研究員として米国の移植医療を学んだ後、フィリピン大学哲学科客員研究員、アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所客員研究員として、フィリピンの臓器売買のブローカーシステムを調査した。現在は福島を拠点に、東日本大震災を取材、報道している。フルブライター、東京大学医療政策人材養成講座4期生、日本医学ジャーナリスト協会員。

日経BP社

[日経ビジネス オンライン](#) [会員登録・メール配信](#) — [このサイトについて](#) — [お問い合わせ](#)
[日経BP社](#) [会社案内](#) — [個人情報保護方針/ネットにおける情報収集/個人情報の共同利用](#)
— [著作権について](#) — [広告ガイド](#)

© 2006–2011 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

